

Title	メルロ=ポンティの芸術論における絵画表現での徳 (vertu) についての探究
Sub Title	
Author	常深, 新平(Tsunefuka, Shinpei)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.98 (2024.) ,p.97- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2023年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000098-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メルロ＝ポンティの芸術論における絵画表現での 徳（vertu）についての探究

常深新平

1. 研究目的と研究方法

人は「この色は何かしっくりこない」と感じて色を塗り直すことがある。この際、私たちは「何をなすべきか、何が正しいか、何が合理的か」（Liebesman: 2018: 1015）といった規範的事実を念頭においているかのように、自身の表現を感覚し修正している。だが、自分が「しっくりくる」として描いた絵が、他人から見て「趣味が悪い」とされることもあるだろう。では、絵画表現固有がもつ規範性および、価値判断される際の絵画表現の特性とはいかなるものなのだろうか。

フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティ（1908-1961）は絵画論を展開した複数の論考で、この規範性の問題について考えていたことが明らかになりつつある。とりわけ彼は、絵画表現にはそれ固有の「徳vertu」があると述べており、明らかに何らかの規範性を想定している。申請者は、「メルロ＝ポンティの芸術論における絵画表現での徳（vertu）についての探究」という題目で、2023年度の博士課程学生研究支援プログラムから助成を受け、本研究の目的を以下のように設定した。すなわち、身体を軸にしたメルロ＝ポンティの絵画論において、（i）絵画表現における徳とはどのようなものか（ii）絵画表現を介してある種の徳性を備えた人になることがいかに語られうるのか、の二点を解明する。

本研究の目的を達成するため、メルロ＝ポンティのテキストを用い、それらの内実を明らかにするため、本研究では以下二つのアプローチをとる。

- ①現代の哲学（とりわけ行為論と価値論）の文脈を参照して、メルロ＝ポンティの論証を再構成する。
- ②ある人物が画家となっていく具体的エピソードで、メルロ＝ポンティの主張を肉付けする。

2. 研究成果

最初に付言しておく、本支援プログラムでは申請した金額の半額ほどになったので、②の調査が困難になった（ただし、現在も当該の画家に対する調査は続いている）ということがある。そのため、①の研究に注力することになった。

メルロ＝ポンティは文学、絵画、音楽そして数学と、身体化された様々な実践を考察していた。彼はとりわけ『見えるものと見えないもの』において、どの身体化された実践であれ「感性的理念」（VI 196）が基礎的なものとして関わっていると語る。そこで、まず、私は、メルロ＝ポンティが絵画・言語・数学といった表現種それぞれを、感性的理念という概念を用いて、いわば共時的にパラレルに扱っていることを示そうとした（関連業績1, 3）。そこで、この感性的理念という概念を、対概念としてメルロ＝ポンティが持ち出している「知性の理念」と比較しながら解明しているアンドリュウ・インクピン（2021）を参考にしながら、さらに説得的な読解を試みた。そこで判明したのは、メルロ＝ポンティは、感性的理念があらゆる知性に関する成果の発現に基礎的な役割を果たしていると述べているわけではないということである。そうではなく、彼は、感性的理念は、あらゆる知性に関する成果の創造の場

面に関わっているという意味で、知性の理念を基礎づけていると考えている。これによって明らかになることは、以下の二点挙げられた。第一には、インクペンが考えているほど、感性的理念と知性の理念の二つは、絵画、音楽、数学といったさまざまな身体的実践を区別するのには有効ではないということである。第二には、あらゆる身体的実践は、感性的理念に基づきながらも、それ独自の知的体系を構成している、と想定されるということであった。

これらの成果は当初の目的であった、絵画表現がもつ規範性を考えるうえで、重要なものである。まず、上の研究で、さまざまな身体化された実践は、それぞれ固有の規範性をもつであろうと想定された。さらに、絵画表現と例えば数学といった学問とは、同じように社会のなかで価値づけがなされるのだろうか、という問いも生じた。これについては、以下の段落で述べる研究成果につながるものとなった。

メルロ＝ポンティはさまざまな著作において、上で述べたような意味での表現行為がもつ規範性を考察しているように見える。とりわけ、最晩年の芸術論考『眼と精神』では、絵画の歴史に「シナリオ固有の美德〔力量 *vertu*〕がある」（OE 61）と述べていた。ここで、メルロ＝ポンティは、「美德」という言葉で絵画表現がもつ固有の規範性について述べているようだ。ただし、彼はこの言葉を用いた含意について、より踏み込んだ説明をこのテキストではしていない。そこで、中期メルロ＝ポンティのテキストと後期メルロ＝ポンティのテキストを相補的に用いることで、絵画表現固有の規範性とはいかなるものであり、価値判断がなされる際の絵画表現の特性はいかなるものだとメルロ＝ポンティが考えていたのかを考察し、以下のことを明らかにした（関連業績2）。まず、メルロ＝ポンティは、行為一般に関して、周囲環境には行為主体が促されるべき規範性が存在していて、その行為が価値を持つに至るには、社会のなかでどのように受け入れられているのかに影響を受けると論じていた。同じく、彼は一方でさまざまな表現行為にはそれぞれ固有の規範性があると考えており、他方で一つの表現行為が価値判断される際には他の表現行為の規範性からの影響を被ると考えている。そこから、私たちは絵画表現がもつ美德すなわち規範性がどのようなものであり、絵画表現がいかに社会の中で価値判断される特徴をもつと考えられているのかを探った。彼は一方で絵画表現に、それ固有の規範性を認めている。絵画表現がもつ規範性は、後発の行為を「統辞法や論理学と同じ程度」に促す、感覚可能でありながらも分節化されたものである。だが、彼は他方で、絵画表現は、上記のような固有の規範性を持つものにもかかわらず、それが価値判断される際には、偶然的な社会の状況や、他の行為領域の規範性の影響を受けやすいものだ、と考えているのである。

3. 今後の展望

今後は、上記のように述べた美術がもつ固有の規範性が、いかに人間形成に意味を持ちうるのかということをもとめていく必要がある。つまり、絵を描くこと・見ることに含まれる知的内容がいかに人間の経験およびあり方を容受するのかを明らかにするところへと至らねばならない。これを達成するために、研究方法②が生きてくる。すなわち、具体的な画家のエピソードのなかで、ある人が、（絵を描く最中に限らず）さまざまな場面で絵を描くことについて考え、現に作品に結実させ、そして画家になっていったのか、というまさに陶冶過程（人間形成）を垣間見ることができるのである。これによって、メルロ＝ポンティの表現論を人間形成論の観点から再構成し、美術科教育と美術家養成教育を共に下支えする美術教育の基礎理論を提供するという、当初の目的が果たされることになる。これは現在執筆中の私の博士論文で結実がなされるであろう。

4. 関連業績

〈口頭発表〉

1. 常深新平, 「メルロ＝ポンティの「感性的理念」と「感性的世界のロゴス」は何を指すのか——「知性の理念」との非対称的関係を手がかりに——」『日本メルロ＝ポンティ・サークル第29回大会』, 日本大学・通信教育部1号館 (31教室), 2023年9月16日。
2. 常深新平, 「メルロ＝ポンティにおける絵画表現についての価値判断と規範性」, 『日本倫理学会第74回大会』, 神奈川大学みなとみらいキャンパス, 2023年9月30日。

〈論文発表〉

3. 常深新平, 「「知性の理念」の基礎としての「感性的理念」—インクピンのメルロ＝ポンティ解釈を手がかりに—」, 『メルロ＝ポンティ研究』第29号, 2024年9月発行予定 (1.を元に投稿した論文, 査読あり, 採択済み)。

〈その他 (書評)〉

4. 常深新平, 「「道德教育の地図」で歩むために——岸本智典編著『道德教育の地図を描く』書評——」『三田教育学研究』(31), 54-61頁, 2023年7月

文献

メルロ＝ポンティの一次文献

[OE]: *L'œil et l'esprit*, Paris: Gallimard, 1964 ; reed., Paris: Gallimard, coll. « Folio essais », 1985.

[VI]: *Le visible et l'invisible*, Paris: Gallimard, 1964 ; reed., Paris: Gallimard, coll. « Tel », 1979.

その他の文献

Inkpin, A. (2021), "Merleau-Ponty's 'sensible ideas' and embodied-embedded practice," *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 22 (2), 501-524.

Liebesman, D. (2018), "The Normativity of Meaning," *The Oxford Handbook of Reasons and Normativity*, pp. 1015-1039.